

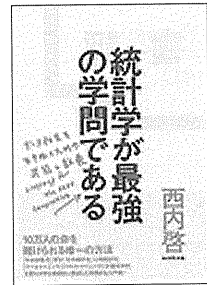
『統計学が最強の学問である』

●西内 啓 著

(ダイヤモンド社, 2013年, 四六判, 316頁, 1,680円)

●鈴木 督久

(日経リサーチ取締役)



このようなベストセラーの書評の場合、内容を要約して、一読の価値を伝達するという一般的な作法は、採用しなくてもよいだろうと思える。

第一印象は書名と西内啓の若さであった。

学者の習いでは、このような書名は遠慮する。統計学より哲学のほうが強くと反論したい訳ではない。最強と主張する理由も書いてある。1年で30万部も売ったダイヤモンド社による命名とマーケティングの巧妙、それを受け入れた西内の立場が、この本の性格を示している。

統計学者は読み始めてすぐに苛立つ。信頼区間の計算は間違っているし、ゴルトンとゴセットが逆で減茶苦茶だということになる。しかし統計学の教科書だと思っただけではない。統計学と無縁だったビジネスマンがいっせいに買って読んだ。彼らにとっては「ゴのつく外人」程度でかまわない。

確率変数から始まる標準的な教科書はつまらない。最後まで読んで、統計学の価値を知らしめ、統計学を大衆化したことが素直に評価されるべきである。奥野忠一から大橋靖雄に流れる正統的な統計学教育と薫陶はよく受容されている。間違いに悪意はなく、指摘されれば増刷のたびに修正している。統計学者なら知っているエピソードばかりというが、ならば統計学者が書けばよかったのであって、最近のビッグデータの流行と、統計学ブームの尻馬に嬉しそうに便乗している統計学者は、この本に文句をつけることはできない。

西内は30歳を超えただけである。名刺の肩書には「統計家」とだけある。この若さで統計学を背負った啓蒙書を書いたことに驚くが、そこで思い出すのは吉村功である。岩波書店の『科学』に「アザラシ状奇形の原因」から連載を始めた1971年、吉村もまた34歳の気鋭であり、統計学を社会に叩きつけたのであった。

「水道会社Aを非使用、以上」でコレラの流行

を止めた統計学的証拠の強力を楽観的に誇る解説を読むとき、サリドマイド販売量と奇形児出生は無関係だと、データから示す悪質もまた統計学者であったことを想起する。もちろん統計学が隠した事実も、同じ統計学によって、眩しさのあまり目を開けていられないほど明晰に白日に晒されてしまう。吉村が名指して杉山博のゴマカシを分析し、次々に統計学的に暴いていく論文を、私たちは泣きながら読んだが、西内の本では涙が出ない。この屈折のない軽みが全体を貫いている。

「自分の人生を自分がいつでも最善にコントロールできるという幸福な実感」(おわりに)を、統計学に感じたことがない私の僻みか、「最強の学問」で、本気かねと思う。医学的に原因不明であっても、統計学的証拠があれば行動を決定する方法論の強調が基層にある。水道会社の違いがコレラ死亡の最大因子なら、A社の水道を止める。妊娠初期のサリドマイド服用が奇形・非奇形児出生の最大因子であれば、すぐに販売中止とする。そういう決定を現実社会は必ずしも実行しないので、統計学には支援が必要である。この本の成功の評価とは、その意味である。

ヒトを対象とする統計学が到達している現在の最高の方法論はRCT (randomized controlled trial) である。そこから無作為化できない場合の統計的方法を解説していくのだが、第6章24節では疫学・生物統計学との対比で、社会調査法が揶揄されている。社会学と心理学、観察と実験という対比でもよいが、本質的には無作為抽出と無作為割付の相違である。私たちとしては、もっと議論を深めてほしいテーマなのであるが、ありきたりの対比で終わっている。ほかの分野の専門家にとってもそれぞれ第6章は、西内の秀才に対して不満が残るであろう。啓蒙書の限界か、西内の限界か。